車は日常生活の足――ここで暮らし続けたい

高山　悟さん（奥畑在住）77歳

16歳で免許を取得し、今年で運転歴61年目を迎える高山さん。現在、シルバー人材センターで勤務し、町からの配布物を毎週第４金曜日に玉川地区の区長さんのもとへお届けしている。

車がないと生活できない

「最寄りのスーパーまでおよそ10キロ。山間地域での生活には車が欠かせず、毎日利用しているよ」と話すのは奥畑地区にお住まいの高山さん。奥畑地区は役場第二庁舎から、車で15分ほど走ったところにある山間地域。町内のスーパーであっても、移動には時間を要し、生活には車が欠かせない。

大学時代に、自動車部に所属するほど、車が大好きだった高山さん。現在の愛車は23年乗り続け、現在の走行距離は約39万キロ。愛車とともに日本各地を巡った思い出を語る高山さんの表情には、自然と笑みがこぼれる。

法を守り、命を守る

「わき見運転、交通法規の遵守、運転マナーには常に気をつけているよ」と高山さん。ニュースで高齢者の事故が報道されるたびに、原因は何だったのか考える。高齢による反応の衰えなども認識し、安全運転を心がけているという。「他の人から運転を指摘されたらすぐ返納するさ。まっすぐ運転できないようじゃ危ないからね」と高山さんは笑う。

愛車とともに、残りの人生を――

妻を亡くして数年がたつ。「一人暮らしだと、車のない生活は厳しいね。安全運転を心がけながら、今の車には40万キロまで乗り続けたいと思っているよ。周りから運転を指摘されたり、車の傷が増えるまではね」と高山さんはにこやかに話す。

スーパーもなく、生活するには不便な場所。それでも妻と過ごした思い出の場所に住み続ける。そのためには車が必要――。高山さんの覚悟が表情に浮かぶ。自分の技術と向き合い、可能な限り車とともに人生を歩む。それもまた、ひとつの選択肢なのだろう。

大野地内

正解はひとつじゃない――自分にできる最善の一歩を

運転を続けるか、返納して新しい生活を始めるか――。果たして正解はあるのだろうか。人それぞれ置かれた環境は違う。都市部のように公共交通機関が発達し移動が容易な地域もあれば、車なしでは生活に不便を感じてしまう地域もある。家族が身近にいてサポートを受けられる人や、そうでない人。車とともに人生を歩んできた人。状況も、想いも、人それぞれ――。だからこそ答えはドライバーの数だけあるのではないか。大切なのは自分の暮らしにあった選択を考え、納得のいく一歩を踏み出すこと。

自分の技術を過信せず、常に謙虚さと慎重さを忘れない。何よりも大事な心構えだ。そして事故を起こすのは高齢者だけではないということ。いつ、誰が、どこで起こすか分からない交通事故。運転には危険が伴うという自覚を持ち細心の注意を払うことが、地域全体の安全につながる。明日も笑顔でいられるように――。さあ、今日も安全運転で「いってらっしゃい」。